

やさしい王さま



島さち子

あやうごうせい

装
画

島
さ
ち
子

やさしい王さま

ポワンはお兄ちゃんのアワンと、庭の草とりをしていました。

「うわあ！」

アワンが大声をあげました。

草をとったあとのかわいた土の上に、白いまめのようなものが、いくつも、いくつもころがっているのです。

よく見ると、くるくるうずまきになったカイで、中はカラッポでした。

「大昔のカイだよ、まっ白だ！」

白いカイはうすくて、中のほうまで光りがすきとおって見えました。

「大昔？」

ポワンは聞きました。

「そうだよ、大昔、この庭は、海だったんだ！」

「本当なの？」

「そうさ、カイのカラーが、こんなにいっぱいあるんだから、土の中には、もっともっと、たくさんあるよ、きつと！」

お兄ちゃんのアワンはじしんまんまんていいました。

この小さな庭が、むかし海だったなんて、ポワンはびっくりしてしまいました。

海といえば、広くて、広くて、青くて、水ばかりのところ。

お魚さんが、スイスイおよぎまわっている、ところなのに……。

夢みたいなおはなしだな、ポワンは思いました。

アワンはどんどん土を掘っていきます。

ポワンも、どろんこになって掘りましたが、カイはもう出てきません。

「パパ、うちのお庭、昔、ほんとに海だったの？ カイガラがたくさんあったよ！」

アワンとポワンは白いカイガラを、パパの大きな手のひらの上のせて聞きました。

「ほう！ これは、これは……。庭にあったの？ みんな死んだのか？ かわいそうに！！」

「かわいそうって？」

アワンが聞きかえしました。

「かわいそうって、かたつむりがこんなに死んだからだよ！ このお庭には、パパが子どものころから、二年まえまでは、たくさんのかたつむりがすんでいたんだ。きみたち、気がつかなかったか？ ちかごろ、見えなくなったなあと、おもっていたら、みんな死んでしまっていたんだね！」

パパは悲しそうな目をしていいました。

「これ、かたつむりなの？」

ポワンは目を丸くしてパパに聞きました。

「うちのかたつむりはね、みんな右まきだった。これ、ほら見てごらん、右まきだろう？ かたつむりのカラはうすい。海にいるカイは、もつとかたくて、あつくて、じょうぶだ。かたつむりはね、この庭の水はげがよくなくて、前みたいに、じめじめしていなくなったから、生きていけなくなったらしい！ 町に下水道ができたせいだろう。かわいそうに……」

パパはパソコンのでんげんをきりながら、立ちあがりました。

「そうだ、おはかをつくってあげよう！ もつと、かたつむりのカラがあったら、集めておいで！ もつと大きいかたつむりだっているはずだが？」

ポワンとアワンは白いカラをさがして、パパの掘ったあなに、うめました。

パパは木の枝で、じゅうじかをつくりました。ポワンはおはかにおまいりしながら、思いました。一ぴきくらい、生き残ってる、かたつむりだって、いるんじゃないかな！！

ポワンは庭のすみの、あつきでぐったりしている、アジサイの葉っぱのかけをさがしました。
「かたつむりさーん！ かたつむりさーん！」

大きな声でよんでみると、何かが、がさりと動いたような気がしました。
気のせいかな？

ポワンはぐったりしているアジサイに、じょうろで水をあげました。
しゃあしゃあ、水がはっぱの上をながれました。

「ああ、ありがとう、ありがとう」

そのとき、小さな声が聞こえました。

「だあれ？」

ポワンは声のしたほうを見ました。

「わしじゃ、かたつむりじゃ！」

「えっ？」

見まわしても、だれもいません。アジサイの葉っぱのかけにも、とりのこした、草のなかにも見あたりません。

「わしは、おぬしの足もとにおるわ！」

ポワンは足もとを見ました。

ポワンの頭より大きいコケのはえた石の下から、によつきり首をだしているのは、かたつむりさんみたいでした。

「この大きな石の下に、かたつむりはいるんだよ！」
アワンがしんぱいしています。

「わしは、年をとって、死にそうなんじゃ！ おぬしらに水をかけてもろうて、ようよう、角がでた。おかげで、氣ぶんソウカイじゃ！！ しかし、わしのなかまたちは、みんな死んでしまつたらしいの？」

ポワンは、息を大きくすいこみました。

「わしは、かたつむりの王さまじゃ！！！」

かたつむりの王さまは、すつくと長い二本のやりをたて、かすれた声でいいました。

「王さまじゃから、わしはリツパで、大きなごてんにすんでいるんじゃ。すこしはたくわえもあつた、それで、水がなくても、なんとか生きのびて来れたんじゃが、ひとりぼっち！ 待っても、待っても、だれもむかえにきてはくれない！！！」

「待ってるって、だれを待っているんです？」

ポワンは膝をついて、王さまに顔を近づけていきました。

「王子を待っているんじゃないよ！　王子は家来をつれて、すみよい国をさがしにいった。2年前のことじゃがの。わしのなかまは足ののろいから、なかなか進めないのじゃろう。くろうしているにちがいない！」

「で、王さまは、歩けるんですか？」

お兄ちゃんのアワンが聞きました。

「歩けるなら、わしも、王子たちと一しよにでかけていったさ。知っているか？　この町はからにかわいて、としよりのかたつむりの歩けるところなど、どこにも、なくなってしまうたわ！　かたつむりは歩くとき、しるをだして、すべるように這っていくんじゃないが。そのしるが、この町では、からからにかわいてしまうのよ！！！」

「それって、パパの言ってた、下水道が出来たせいかな？　それとも、雨の降らないせいかな？」
アワンがポワンをふりかえって、首をかじげました。

さっきまで、しおれていたアジサイが、水をすって、いくつもの、小さな空いろの花びらをひろげ、目の前で、スローモーションのえいぞうみたいに、ゆっくりと立ち上がっていきます。

「かわいそうだなあ、かたつむりの王さま！！　石の下なんだよ！　石を取っばらってあげようか？」

お兄ちゃんのアワンが、指をなりました。

そのとき、ばりばりっと音がして、ぬうっと、かたつむりのやりが、のびあがったんです。

「あっ！」

王さまは、ぐるりとあたりを見まわしてから、声をあげました。

「わしの黄金のごてんは、どこにいったんじや？ わしのごてんが……。ぴっかぴっか、輝いていた、黄金のごてんが見えない！！」

「そんな？ 王さま、黄金のごてんなんか、どこにもないよ！」
ポワンはいいました。

「王さま、黄金のごてんなんて、どこにも見あたりませんよ。石の下でもない、草のなかでもない、しおれたアジサイの花のなかにもありません！！」

アワンがりょう手を広げてから、首をすくめました。

「どろぼうにやられたんじや、そうにちがいない！ しかし……」

王さまは、首をちぢめ、つのも、やりも、目玉も、みんなひっこめてしまいました。

「すこしだけ、しずかにかんがえさせてくれんか！ わしはとしをとった。その上、家来の死にうちのめされて、いろんなことを忘れてしもうた。じやが、水を飲んだからには、思い出せることもあるにちがいない。わしは、時間がほしい！！ おぬしたち、わしが思い出すまで、待っていてはくれないかな！」

王さまはひくい声でいいました。

なにを思い出すのかな？

ぴっかぴっかの、黄金のごてんだなんて、本当に、あったのかな？
あったとしたら、王さまの、夢のなかさ！
ポワンは思いました。

「あっ！ 光ってる！」

アワンが叫びました。アワンの指さした、水のしずくが光っています。

アワンが、かがみこんで、しずくのたまっている石の上を、ごしごしこすりはじめました。
大きな石が、ぐらぐら動きました。

「くすぐつたいよ！ やめてくれ！」

王さまがヒメイをあげたのです。アワンはかまわずに、こすりつづけています。

ピカリリ！！ そのとき、石が光ったんです。

「見ろ！ この石が、金なんだ！ ポワン、これこそ、かたつむりの王さまのきゆうでん、黄金のごてんだよ！！ これが、かたつむりのカラなんだ！！ やったー！！」

お兄ちゃんのアワンは、こうふんして、飛び上がりました。

「おれたちで、ぴっかぴっかにみがいてあげようよ！！ ほら、みがいたところは、すつごくき

れい！ 王さまのごてんにまちがいないさ！！」

ポワンも、みがきはじめました。そのとき、王さまが顔をあげました。

「待て、待ってくれ！ おぬしらは知らんじやろうが、もともと、かたつむりのカラというものは、よごれないものなんじや。こまかい、へこみが全面にあつてのう、どんなときでも、わしらはきれいなカイガラを背おつて生きてきたんじや。それが、わしら、かたつむりぞくのホコリじやつた！！ わかつて来たぞ、わしのごてんが見えないわけが！！ わしがこうして、ごてんにすんでいるということは、わしのごてんはあるということじや。じゃが、見えない！ それには、わけがあつたんじや！ わしは、思い出した。が、まだ、すべてを思い出したわけじやない。もう、しばらく、静かにしておいてくれまいかの！」

「いいですよ、王さま！」

ポワンとアワンは、日でありで、茶いろになった、しばふの上に腰をおろし、王さまが思い出すまで、おとなしく、待つことにしました。

ふたりで、しばふに、寝っころがっていると、カエルのケロップが、ポワンの顔の上を、ぴよん、ぴよんと、飛び越えていきました。なにかあわてているようです。

「まあいいか？ 親友だもんな！」

ポワンはつぶやきました。ケロップも、池の水が干上がってしまい、外出が、おおくなってい

ます。

「ケロップのやつ、大きな池にひっこす気かな？」

アワンがケロップを目でおいながらいいました。ケロップが友達のカエルたちと、頭をつきあわせてケロケロ話している声が大きくなっていくようです。

お姉さんが、スキップしながら、門の方から、やって来ました。何かいいことあったのかな？アワンとポワンは思いました。

お姉さんは、よせばいいのに、ぼくらの目の前で、バレリーナみたいなおじぎをしようとして、スカートのおそを持つたまま、ずっこけました。

「ああ、いた！あなたたち、そろって、なにをたくらんでるの？このつけもの石、なんでこんなところにあるのよ？危ないじゃない！それにしても、へんな石ね！あれ、いま、ぴかっと光った！たしかよ！なんだろ？金のこう石かな？どれどれ、お姉さんに、よく見せて！！」

しりもちをついたままで、お姉さんは、王さまの体に、さわろうとしています。

「だめだよ！だめだったら！！いま、かたつむりの王さまは、考えごとをしてるんだから！！」

ポワンはお姉さんと、王さまの間に割って入りました。

「なに、とぼけてるの？わたしたち、大がねもちになれるかもしれないのに！！そうだ、パ

パを、よんでこようつと!!」

お姉さんは家のほうへ、ちやうとつきゆうで、走っていきます。

そのとき、ごてんが動きました。

「いまの女は、だれかな? いやいよ、悪ものが、わしの黄金のごてんに、目をつけたらしい! 思い出したぞ!!! わしの国の、だいじんが、わしにいい残した言葉を!!! 黄金ごてんは王さまの命を、危うくしますから、ごてんの表面に、メイサイシヨクをほどこしましたと、そう言うたんじや。つまり、目だたなくするために、コケを植えつけたと、そう言うたんじやよ。悪い人間が、つけねらっていますから、気をつけてください。そう言い残して、死んでいった!」

ぴかっ!ぴかっ! 王さまの目が、ダイヤモンドみたいに光りました。

「もともと、わが国は、このあたりの湿地帯を治める、大国じゃった。おぬしたちの生まれる、ずっと、ずっと、前のはなしじや。それを、人間どもが、われわれの国をふみ荒し、いらぬ工事をかさね、すっかりすみにくくしてしまつた。その上、カンバツがやってきた! 国民は、ひあがつて、つぎつぎ死んでいったんじや。そこで、わしは、もつと南の、すみやすいところに、あたらしい国をつくるようにと、命令したんじや。センケンたいを、まず出立させ、つぎに、王子のひきいる、ホンタイが出かけていった。王子からの音しんはない。王として、けつだんしなければならぬときが、来ているんじや。輝かしい王国の子そんとして、わしはこのごてんを、王子にひきつがなければ、死んでも、死にきれん! そのために、わしは出立したい! しなけ

ればならんのじゃ!!」

王さまは、すがたをかくしたまま、むねんそうな声だけがひびいて来ました。

「でも、王さま! コケだらけでは、重くて重くて、歩けないよ! 歩かなければ、王子さまとあうこともできないじゃん! へんなコケは、落としたほうがいいにきまつてるさ!」

ポワンがいました。

「さっきの女は、ぼくたちのお姉さんです。人のものをぬすんだりはしませんよ。安心してください!」

アワンが、王さまのしんぱいをさっしたようにいいました。お姉さんはまだ、もどってきません。こんなこと、すっかり忘れて、ケーキでもほうばってるころさ! ポワンは思いました。

ポワンは、また、ごてんをみがきはじめました。ていねいに、すみからすみまでコケをけずり落としていきました。

アワンが、となりの家から、井戸水をもらって、よいしょ、よいしょと、はこんで来ました。水が、しゃわしゃわと、ごてんの上で飛びはねます。

「ああ、これで、きつと、かたつむりの王さまも、生きかえるよ!」
ポワンとアワンがごてんをのぞきこみました。

「かたつむりの王さま、水飲みましたか? 元気出ましたか?」
ふたりは声をそろえていいました。

「ああ、よくやったぞ！ 飲めないが、目玉はあらった。ようやく、生きた心地がする！！ 体が動くようじゃ！」

王さまのまんぞくそうな声が、かえってきました。

「どうじゃ、ごてんはきれいになったかの？ ルビーや、エメラルドがちりばめてあるのがわかったかな？ 王の目玉にはダイヤモンドが、やりにはぞうげが、角にはオパールが、見えるはずじゃが、わかるかのう？」

アワンが、ポワンのみがいだごてんの上から、バケツをかたむけて、井戸水をながしました。よごれたコケがうずまきながら、ながれ落ちていきます。

日の光が、アジサイの葉っぱのあいだを通って、金色のごてんにちりばめられた、宝石の上で、十字になって輝きました。ルビーの赤、エメラルドのみどりが、金色と、似合っているようです。

「王さまは、こんなに、美しいごてんに、すんでいたのか！！」

アワンがため息をつきました。

「これで、だいぶ、軽るくはなっただろう？ 王さま、こんどこそ、歩けるかな？」

アワンが体を振ると、夢からさめたようにいいました。

「明日から毎日、水をかけてあげるから、1メートルでも、王子さまのいるところに近づきましょう、歩いてください！！」

ポワンはやさしくいいました。

「ありがとう。ようし！ 動けるか？ 動けないか？ 力いっぱい、這って見よう！ う、う、う……」

かたつむりの王さまは、ごてんを背おって、じりじり動きました。

「王さまの体力では、ごてんは、まだまだ重い！ 王さまは、水も、えいようも、たりないんだ！ お兄ちゃんのアワンは、ちゅういぶかく王さまを見つめています。」

ポワンは庭から家のなかにかけてこみました。

「わが家だって、だん水なのよ。お庭に水をまきたいのなら、水道の水が出るようになってから、まきなさいよ！」

ママが言っています。

「かたつむりの王さまは、死にそうなんだよ。そんなこと、言っていられないんだから！！」
ポワンはママのいけた、かびんの水を半分わけてもらい、王さまのところに、もどって来ました。

「おお、この水は花の匂いがするの。早く、きれいになった、ごてんの上からそいでおくれ！ そしたら、わしの口もとに、したりおちて来るはずじゃ。早く早く、命令じゃ！ 早くしないか！ ぐずぐずしていると、家来には、してやらんぞ！！」

王さまは、かんしゃくをおこしたようです。

「王さま、すつごく、きれいなきゆうですわね！！」

ふたりは声をそろえて、言いました。

「そうじゃろう、そうじゃろう！ 先祖代々、伝わって来た、ごてんなんじゃ。わしは王子にこれを、渡してからでないよ、死ぬないんじゃ。おお、ごてんが、だいぶ軽くなつたの。ありがとう！ おぬしらのおかげじゃ。そこで考えてみたんじゃが、わしの体力では、1日3メートルくらいしか歩けない！ じゃから、毎日3メートル南のほうへ、水をまいてはくれまいかの！ そうだな、草の葉っぱもまいておいてくれたら、とても助かる！」

かたつむりの王さまは、言うよ、ふたりを、長いやりのさきの大きな目玉でじつと見つめました。

アワンは受験があるというので、ポワンは、かたつむりの王さまのために、そうすると、やくそくしました。

ポワンは、朝おきると、すぐ王さまにあいさつをし、水をまいてから学校へ行きました。

「おまえは、あいかわらず、よりよいの悪いやつだな！ 王さまが、あんなにのろろしてたんじゃ、何時になつたら、王子さまにあえるか、わからないじゃないか？ こんなに、のろろ歩くなんて、時代おくれなんだよ！！ ぼくだったら、自転車にのせて、つれていってあげるよ！ なんなら、パパの車に、のせてもらつたらいい！」

お兄ちゃんのアワンは言いました。

もっと早く、そうしたらよかったんだ。王さまの体力は落ちていたんだし、むりをつづけたら、命をちぢめるって、わかっていたんだから。ポワンは思いました。

「王さま、ぼくの自転車に乗ってください。つかれないし、速く行けるもん！ 王子さまにだって、早くあえるよ！」

「わしのカラは、ぐるぐるのうずまきじゃから、やっぱり、目も、ぐるぐるまわりやすいんじゃない。乗り物よいをするから、ダメじゃ！」

王さまは青い顔をして首をふりました。

「そんなら、ぼくのリュックサックに入って、ぼくと一しよに歩いて行くというのは、どうですか？」

王さまは浮かない顔をしています。

「目がまわるって？ やりの先の目玉をしまっておけば、だいじょうぶですよ！！」

アワンがでんでんむしの歌をうたいながら、助け舟を出しました。下のほうに角も見えていました。

「ときどき、葉っぱの上や、土の上でやすませてくれると、約束してくれるなら、そうしよう！」
王さまは長やりをふって、オーケーしました。

こうして、ポワンとかたつむりの王さま、一人と一匹の旅は、はじまったのです。

今年の青葉は、日でりつづきで、かれかかっています。空は、どこまでも、どこまでも、まっ青にすみわたっていました。きもちのよい朝です。

ポワンは、王さまをたいくつさせないように、とくいの鼻ぶえを吹きながら、歩いて行きました。

鼻ぶえは、町のなかにも、かたつむりのごてんのなかにもながれていきます。

ポワンのリュックサックのなかで、かたつむりの王さまは、ふたをきっちりとして、目をつむっていました。ポワンの鼻ぶえのリズムにのって、ポワンの足にあわせて、ずいぶんたくさん歩いたような気がしました。

ポワンは、かたつむりの、なん年ぶんを歩いたのかな？ 王さまは思いました。生まれた土地をはなれて、こんなに遠くまで旅したのは、はじめてでした。

王子らはどこまで行ったのか？ はなれていると、なつかしくなっていくばかりです。2年まえに出発したのだから、王子の歩はばと、速さと、時間をかければ、どのくらい、離れているのか、わかるはずじゃが……。若もののことじゃ、葉っぱにとりついて、車や、飛行機にでも、まぎれこんだら、どんなに遠くへ行ってしまったか、わかりはしない。

ポワンの吹く、鼻ぶえは、陽気に、はずみながら、町の上をながれていきます。町のひとびと

が、さそわれるように、外に、出てきました。

王さまも、ふわふわ、ゆらゆら、曲にのって、体ごと、流れ出していくようです。

やっぱり、乗り物よいかな？ 王さまは、酔いでもさますように、思わずごてんから、二本の長いやりを出してしまいました。目玉はその上です。

ああ、青い空や、高い家や、コンクリートの道路が、かたむいて、ああ、ぐるぐるとまわりはじめました！ もう、とめどなく、まわりつづけるばかりです。目がまわる、あ、あ、あああ、ああああああ、あ、あ、あああああああ！！

「あっ！ あっ！ こわい！ こわい！ こわい！ こわい！ わしをおろしておくれ！！」
王さまがヒメイを上げました。

ポワンはびっくりして、リュックサックをおろし、王さまを、外気のなかへ出してあげました。おお、その時、王さまのごてんが、日の光をはんしやさせ、赤や、黄や、青の、数えきれないくらいの、たくさんの、たくさんの十字になつて輝きました。

「フーン！！ ああ、しまった！！」

誰かに見られたかな？ ごてんが光ることを、すっかり忘れていたポワンは、首をすくめると心配そうに、まわりに目を走らせました。

でも、王さまは、そんなこと、眼中にないように、カラのなかに、逃げ込んで、角を出そうともしません。

「王さま、どうしたの？」

ポワンが心配そうに、のぞきこみました。

「目がまわって、どっちが窓だかわからなくなってしまった。あっち、こっち、やりをぶっつけて、やりがおれそうじゃ！」

「こっちですよ！」

ポワンは、かたつむりのふたを、とんとん、とたたいてあいずしました。

「いやはや、たいへんな目にあつたわい！」

目のまわった、かたつむりの王さまは、ようやく、目玉を出しました。

ポワンは水とうの水をそつと、かけてあげました。

「ぼくら、どこまで、進んだのかな？」

ポワンは、ゆっくり息を吐きながら、体をぐるっと回転させました。ここは、町の中心にある商店街で、目の前には、お姉さんが、かよっている料理教室のかんばんが見えていました。

「世界一のエスカルゴ料理を、あなたに！！」

「あっ！！」

ポワンは口をふさぐと、あわてて、ごてんごと王さまを抱え上げ、リュックサックの中にもどしました。

「どうしたんじゃ、どうしたんじゃ！」

王さまの声が小さくなっています。

だって、エスカルゴって、かたつむりのことだって、お姉さんがいつていたもの、王さまの目にこんなひどいかんばんを見せるわけには、いけないもん！！

早く、遠くに行くんだ……。ポワンは思いました。

「ペーペーペーペー」

へんな音がしていました。

「ジャ、ジュ、シュツ、ポ、ポツピ、シュポ、ペポ、ペポ、パン、パン」

おかしな声と音が重なっていました。

ポワンが、リュックサックをかついで走り出すと、白いコック帽が、ポワンを見るまに取り囲みました。手に手に何かをもっています。

フライパンや、でっかいスプーンやフォークや。ナイフや、はさみを持っているものもあります。

「ボンジュール！」

金ばつの男が笑いながら、ポワンの肩をたたきました。

「こちらは、世界一の、かたつむりの料理人です！！」

つうやくらしい男がいました。

「見ていましたよ。世界一のかたつむりの王さまを！！ あなたは、リュックサックの中にかくしましたね！！」

「そんなもの、しりません！ どいてください！！」

ポワンはいいました。

世界一の男が、リュックサックを指さしています。

「どうか、そのかたつむりの王さまを、ただでとは言いません。ゆずってください！！」

「そんな、王さまを料理するだなんて、売るなんて。なんてことを言うんだよ！！」

ポワンは歯をくいしばりました。

「わたしに、世界一のエスカルゴ料理をつくらせてください！！」

世界一の料理人はいいました。

コックたちがポワンをとりまいて、手に手に持っているものを、叩きながら、のしかかるようにせまっています。

「たまげたなあ、みんな、めっちゃ、背が高い！！」

ポワンは落とした鉛筆を拾うとみせて、かれらの肢の間をくぐりぬけました。

リュックサックにシェフの手がかかったみたい？ リュックサックごと、王さまをうばわれては、おしまいです。

ポワンは、全身でいやいやをしました。必死でいやいやをしました。

まわりが騒がしくなって、シェフの手がはずれました。

「シェフー！！ そのかたつむりは、死んでいますよー！！ そのかたつむりは、くさっていますー

す!!!」

教室の窓から、ポワンのお姉さんがもう、落ちてしまいそうなほど、乗り出して叫んでいるのが見えました。何時もの、のんきな笑い声がひびいてきます。

「ハ、ハ、ハハハハ、ノン、ノン、ノン、ノーです!!! 見たんです! やりはおれて、目玉なにかつぶれていました!!!」

みんなが、教室を見上げて、それぞれに何か叫んでいました。

いまだ!!!

ポワンはもう、うしろを見ませんでした。

つぎつぎに、おってくるコックを突き飛ばしました。

逃げる手がなくなったら、かみつきました。

敵がびつくりしたところで、逃げ出しました。

お姉さんが助けてくれたんです。

逃げました、逃げて、逃げて、逃げまくりました。

かけっこ自慢のポワンの足もヒメイを上げていました。

もうへとへとです。

公園のベンチにすわって、ほっとして、空を見上げると、

「世界一のエスカルゴをどうぞ!!!」

今度は、ひこうせんのおなかで、大きな大きな広告がゆれていました。

料理ではなく、王さまを丸ごと、どうぞと言ってるんです。いつから人間はこんなに、こわいことを、平気で、せんでんするようになったのでしょうか？

ポワンは泣きながら、小さくなって歩きました。

シュツ、シュツ、シュツ、シュツ、ゆく手におなじ間をおいて、青い煙が立ち昇っています。

「こら、チビ！ 王さまのかたつむりを渡すんだ！！」

金色のごてんに気のついたギャング団が、ヘリコプターで、こうげきをはじめたようです。

タツ、タツ、タツ、タ、タタタタタ、タ、銃弾がうちこまれていました。

「こら、チビ！ 王さまの、ごてんを渡すんだ！！」

ボリウムを上げて、マイクが叫びました。

チビ、チビ、チビと何度いったのでしょうか。ポワンも、もう、がまんできません。

「チビじゃないもん！！ ぼく、大きいほうから、3番目！！」

ポワンは 叫びました。

「くくだって、そらで、まちがわずに言えるんだから。うそじゃないぞ！！ 22が4、23が6、24が8、99、81！！」

ポワンの鼻のあなが大きくなりました。

「サンデー、マンデー、チュウズデー、えいごだって知ってんだぞ!!」

ポワンは大声で叫びました。

「エーと、エーと、ぼく、あと何知ってんだっただけ？」

ポワンがつぶやきました。

「おまえら、聞いたか!!」これが、オレラのあいてかよー!!」アハハ、アハハハ、へへへへ、こら、チビ!!」いま、一ひねりにしてやっからなあ!!」アホホホ、アホホホ!!」

ギヤングが笑っています。

笑いころげて、涙なんか出しまくって、もう、下降したヘリコプターのなかで、ハンドルなんか、にぎっていません!

笑いすぎて、つぎつぎに、ヘリコプターは、ついらくしていきました。

おかしな、チビが見たくて、町の人たちが走ってきます。

「ああ、たいへんだあ!!」

まだ、あきらめきれない、料理人たちがそのあとから、追いかけて来ます。

行く手に、ヘリコプターから落ちこちた、黒いふくのギヤングがスルメみたいのにびていました。

ポワンの行く道は、どこまでも、どこまでも、つづいていました。

もうだめ!!」足が、動かない!!」

「お兄ちゃん！！ たすけてよー！！」

ポワンは叫びました。

あっ！ 一歩、二歩、三歩、空中で足をふみました。

「ドッスン！！」

砂がながれている音が、ザーザーザーと、どこか、遠くで、続いていました。

ポワンはつかれきって、そのまま朝まで眠りました。

目ざめると、道路に大きな地われが来ていました。

村に入ったところで、とんとんと、王さまがリュックサックのなかから、ノックしてきました。

外にでも、王さまは昨日のさわぎについて、ポワンに、何も聞きませんでした。

「ありがとう！ ああ、なつかしい、池の匂いじやの。干上がっていても、匂いは消えないものらしい。：：おや、カエルくんの声が聞こえるぞ！ ひさしぶりだなあ：：。さてよ、カエルくんがいるとしたら、王子たちもいるかもしれない！！」

王さまは、生きかえったように元気に、やりを振って、せんすいかんみたいに、しゅういをながめまわしています。

王さまの頭が、ぼこぼこにはれあがり、つのが折れて、たれさがっているのが見えます。王さまも、ぼくと一緒に戦ったんだな！ ポワンは思いました。

ポワンは親友のケロップくんを呼んでみました。

引越しするなら、この池だろうと、アワンが話していたのを、思い出したからです。こんな日にはポワンも、なつかしい友だちに、あいたくなっていたのかもしれない。

「おーい、カエルくん！ おーい、カエルくん！ おーい、カエルくん！！ ぼくの親友の、ケロップくんは、いませんかあー！！」

大きな声で呼びました。大きな声で叫びました。

「ケロツ、ケロツ、ケロツ。ケロ、ロツプ！！」

ケロップくんが、びよん、びよーん、いつもの調子で、こつちにやって来ます。ひき連れてくるのは、ぼくの家の庭で、見たことのあるカエルくんたちです。

「なあんだ、みんなもいっしょだったの？」

ポワンがかけよろうとしたとき、

「ああ、カエルくん。わしの国の、かたつむりのホンタイを、見なかったかのう？」
待ちきれない王さまが、呼びかけました。

「センパツタイは見ましたよ。もっとしめって、すみよいところをさがして、南へむかいました！」
王さまが、がっかりしているのがわかります。

「で、ホンタイには、あわなかったかのう？　たい長は、わしの王子じゃが？　さいきん、かたつむりたちに出あったことは、なかったかな？」

王さまが食い下がっています。

「ある、ある、あります。あるけど、それは、ヒミツです！　悪い人間がねらってるから、ゆだんできないんですよ！」

ケロップは、言ってから、しまったと、口をおさえています。

「どんなヒミツがあるのか、話してくれまいか？　話してくれたら、家来にしてやる！！」

王さまが言いました。

「ケロップはおしやべりだな。もう、言っちゃだめ！　言えば、後悔するにきまつてるもん！」

ポワンがともだちとして、いいました。

王さまがへんな顔をしてポワンを見ました。

ケロップと王さまは、おなじ庭にすんでいたのに、友だちではなかったようです。

「こまっているのは、かたつむりくんだけじゃない。ぼくら、カエルも、死にそうなんです。池も、沼もひ上がって、もうすぐ、水一てきなくなるでしょう。みんなやせ細って、もう、ふらふら。遠くに、飛んで行きそうなんですよ。でも、ともだちを売ったりはしません。これから、みんな、雨ごいをするんですよ！！」

「ポワン、雨ごい、かみさま聞いてくれるかなあ？　かみさま、いるよなあ？」

ケロップは、さいごのことばをポワンに残して、振り返りながら、遠ざかって行きます。

「ポワンは、カエルくんに口止めしたのか？ いや、かたつむりを見たとき、あのカエルは確かに言った。わしの王子は生きているにちがいない！ 王子のカラにも、宝石はちりばめてあるんだ。ねらう、ワルはかならずいるはずじゃ！」

王さまはポワンに胸の中をうちあけるように、つぶやきました。

カエルの歌声が、風につれて、聞こえてきます。

カエルの雨ごいの歌です！！ からだの中から、しぼり出した歌声は聞いているものの胸に、はだかで、飛び込んでくるようだ。ポワンは思いました。

それは、驚いたことに、でんでんむしの曲でした。

でんでんむしのリズムにつれて、王さまの角や、やりが、目だまが、空にむかって突き出され
ていました。

カエルくんたちの歌声は、つぎつぎに、雲一つない高い高い空にむかって、ケロケロケロと手
をつないで、のぼっていくようでした。

村人たちも町の人々も、口をあけて、天をあおいでいます。カンバツがつづいて、お米も野菜
もゼンメツなんです。

みんなが、どんなにお願いしても、カエルたちが、どんなに歌っても、雲の一つも、わき出し
ては来ませんでした。

カエルが雨をよんでも、かたつむりが雨をよんでも、雨はふっては来ませんでした。

雨もふらないのに、その熱気で、池の水が干上がっていきます。

熱つくなつた、さいごの水のなかで、おたまじゃくしたちが、うじゃうじゃと、体をくねらせていました。だんだん、動きがぶくなっていきます。

カエルにもそれを助ける手はないのか、遠くから見守っているだけです。

やがて、みんなひからびて、風に吹き飛ばされていくのでしょうか。

ポワンは、なにを思ったのか、池に手をつっこみ、両手でおたまじゃくしを、すくうと、上着のポケットに突っこみました。

五十匹はいるだろうとポワンは思いました。

世界中がゆれていました。

「あのカエルの雨ごいの歌は、雨は降らなかつたのに、地震を呼んでしまったらしい！」

村の人たちは、うらめしそうに、肩をよせあいました。もう、何日もなにも食べていません。

「震源地はどこなんじゃ？」

かたつむりの王さまがのび上がりました。

「それが、よくわからんのですよ。あっち、こっち、めっちゃ、動くんですから……」
町の人たちが言っています。

「と言うことは、わしのけいけんからすると、地の底に、大きな地割れができたせいに違いはない！
地割れが走っているんじゃない。地上へ、地中へ、地の底へ！ 地の底から、地中へ、地上へ！」

ポワンには、王さまが急に、先生みたいに見えてくるのが不思議でした。

地割れは前からおきていたのかもしれない。ポワンの落ちた道路にも、地割れはいついて、どこかで砂の流れる音がしていたのだから。

そこでも、ここでも、地割れがおき、次々に家がかたむいていきます。

道路も地割れで通ることが出来ません。

ポワンは、駅に入っていきました。線路を伝ったら、先に行くことが出来るかもしれない思っただけです。

駅は、無人駅みたいに誰もいませんでした。

パパみたいに、ポワンも腕を後ろにくんで、時間表を見上げました。パパはどうしているのかなあ。ポワンは目をこすりました。時間が数字が、何重にも見えています。駅舎がガクガク、音をたててゆれはじめました。足もとに、くもの巣みたいな地割れが広がっていきます。

おたまじゃくしがいつせいに、ポワンのポケットから、ピョン、ピョンと飛び上がりましたので、ポワンも一しよにピョンと飛び上がりました。

リュックサックもピョンと飛び上がりましたから、かたつむりの王さまも、ごてんと一しよにピョンと飛び上がって、外に一緒に飛び出しましたので、駅がつぶれても、だれも、けが一つしませんでした。

いつのまにか、おたまじゃくしには、足がはえていたんです。

村はあつちでもこつちでも、地割れがして、地割れのなかから、なぜか、白いおいもが顔を出しました。

「このいもたちには、親がいるはずじゃ、震源はそこにちがいない。親をさがせ！！それが、カンバツも呼び寄せているんじゃ、親を探せ！！」

かたつむりの王さまは、長い二本のやりをふっています。

聞き耳をたてていた村人たちが、おいもの親を探して、村中を走り回っています。町の人々がおいもの親を探して、町中にらみをかかせ、車やバイクで探し回っていました。

走り回った人々は、言い合わせたように、町と村のさかいにある、天を突くような大木の下で、休みました。

天をかくすほどの、みどりの葉の上を、風が渡っていきます。

大木は、カンバツにも負けないで、枝を広げ、青々とした葉を茂らせ、さやさやと風にゆれ、小鳥を止まらせ、虫を育てて、この地震のなか、しっかりと足をふんばって、立っていました。

「見ろ！！」

王さまが木の足もとをさしています。

そこには、大きな大きな、じゃがいもが、顔を出していました。

「これが、親芋だ！！ この木から出たつるに、お化けのような芋が鈴なりになって、地中で育つて、水分を独り占めにして、地割れを広げていったんじゃ！！」

時計塔の時計は午後三時を指していました。

王さまはじゃがいもの大木を、何時までも、何時までも、見上げていました。

「おお、じゃがいもの葉っぱじゃ！！」

信じられないと、声をひそめていた村人たちが、地面を掘りはじめました。

「うんこらしよ、どっこいしよ、うんこらしよ、どっこいしよ！」

町の人々もまじって、みんなで、つるを引っ張りました。

「うんこらしよ、どっこいしよ、うんこらしよ、どっこいしよ！」

引っ張ると、大きな大きなじゃがいもがころころ、ころころ、でてきました。

「ああ、すごいなあ、うれしいなあ！ これで、みんなのお腹もいっぱいになるなあ！！」

「おお、すごいなあ、楽しいなあ！！」

見る間に、ジャガイモのお化けで、地上はいっぱいになりました。

地割れにそって、小ささまさまのじゃがいもが、つるになってつながっていました。

あまり、芋が太るので、そこから地割れが走って、いろんなところで、地震がおきたんだなど

ポワンは思いました。博士になった気分です。

村も、町も、大祭りです。おおじやがいもの木の下で、踊りが、何時までも、何時までもつづいていました。

ポワンは王さまが酔わないように、そっと、踊りの輪から抜け出しました。

「このままでは、おたまじゃくしは死んでしまう！　なんとかしなければならんの！」

かたつむりの王さまが、言いました。

「ポケットに水を入れてあげても、水のもるものは、止められません。ビニールの袋でもあれば、いいんだけど……」

ポワンがポケットをのぞきこみながら、いいました。

「わしの決心がつけば、いいんじやが！」

王さまがつぶやいているのが、聞こえました。

何を決心するんだろう？　ポワンは思いました。

「わが国には、昔から事件がたえんかった。いや、わしのことじゃない。わしは大じょうぶじや！　わしの代になってからというより、昔の昔の、もつと昔からのことじや、わしらの着ているカイ

ガラが、大へんな値打ちもんで、そのために、かたつむりは命をねらわれる！ というウワサが たったんじや。誰だって、命がおしいし。死はこわい！ 殺されるのは、なおさらのことじや。それをこわがって、先祖のかたつむりたちは、どんどん、カラを、ぬぎかえて、急いで、急いで、大人になって。それでも、まだ、ぬぎたがって、ナメクジみたいに、はだかになるものが、続出したんじや！！」

「この間みたいに、ギヤングか、料理人にでも、ねらわれたの？」

ポワンが、びっくりして言いました。

「そうじやよ。みんな、戦うことをしない、やさしい国民せいに、つけこんで来たんじやな！」

「つけこむって、どういうこと？」

ポワンが首をかしげました。

「ばかにして、そこを攻めていくことじやよ。やさしければ、自分から戦争してこないとわかっているだろう、安心していじめることができる」

「そんなこと、ぼく、ゆるさない！」

ポワンは腕をふりまわしました。

「ポワンは元気がいいのう！ われわれ、かたつむりにも、そんな元気がほしかったんじや、裸になった、かたつむりたちは、家をすてて、かくれるところもたず、敵を攻めるほうほうもしらず、こわくなって、死をえらんだ。集団自殺じや！ わしのごてんの下には、かれらが葬られ

ている。かれらが、最後に夢見た黄金ごてんの下で、優しく保護されてきたんじゃ」

王さまが、ふーと息をすいこむ音が聞こえました。やりのうえのこぼれそうな目玉が大きく振り回されてきました。悲しいはなしだなあ、ぼくだって！ そう思ったとき、王さまが、元気よく話し始めました。

「決心がついたよ！！ わしも、わたらの先祖のかたつむりにならって、この大きな、御殿をぬぐことにする！！ ポワンには、このごてんをさかさにして、水を入れ、おたまじゃくしたちを、その中で育ててほしいんじゃ！」

ポワンはおどろいて王さまを見ました。

「ポワンくん、わしは、きみに、こうして背おわれて、ここまでつれてきてもらうた！ それは、感謝している！ そして王子が、カエルくんに助けられて、ぶじでいるらしいこともわかった。そこで、命のあるうちに、わたしの出来ることを考えてみたんじゃ、そして、わかった。どうしたらいいか、わかったんじゃ！！」

「黄金のごてんで、おたまじゃくしを助けて、カエルくんに恩返しのももりなの？」

ポワンの声がふるえました。

「いや、まったく違うよ！ こうやって、連れてもらって動いても、わたしの体は生ってしまうだけじゃ。そこで、岩のようにかたい決心で、わたしの王子のために、最後のごてんを捨てていくことに、かくごをきめたんじゃ！ 裸で、自力で生きたい！ 自力で生きさせたい！ そう思った

んじゃよ！ そのためには、かざりものは、いらなんだ。黄金のごてんなんぞ、不幸のはじまりじゃ！ ポワンくんにまで、大変なキケンを与えてしまうたの！ 王子にはもっと、身軽に、平和に生きてほしいんじゃ！！ ごてんを捨てても、生きていく元気があれば、頭があれば、仲間があれば、生きていける。ポワンやアワンのようにのう！！」

王さまはそのままじっと、目をつむっていました。

「そう、でも、もったいないなあ。こんなにきれいなものを、本気ですてるんですか？ さっきのさっきまで、このごてんを王子に引きつぐまでは、死んでも、死にきれないと言っていたのに？」

ごてんをすて、なめくじみたいに、裸になる！ ポワンには、いくら考えても、よくわかりませんでした。祖先のかたつむりだって、家をカラを捨てたために、無力になって、死んでいったのに……。

「お兄ちゃん！！！」

ポワンは叫びました。

「なにを、うろたえているんじゃ！ 早く、おたまじゃくしを、ごてんのなかにうつすんだ！」
ごてんをぬぎすて、裸になった王さまが、えらそうに言いました。

ポワンは泣きながら、ごてんをさかさにして、最後の水筒の水を入れ、その上で、ポケットを裏返ししました。

ぼと、ぼと、ぼとぼと、ぼとぼとぼとぼとぼと、ぼと、ぴっちゃーん!!!
おたまじゃくしが、うれしそうに、ごてんの中を、およぎまわっています。
王さまは裸の、なめくじみたいな体で、それをじっと見つめていました。

——自力で生きる!——

王さまは岩のような決心をしたんです。

でも、たいへんだなあ、もったいないなあ、ポワンは、また、思いました。

ケロップ、ポップ、ケロップ、ポップ、ごてんのなかの五十匹のおたまじゃくしは、五十匹の立派な、カエルになりました。

カエルたちは、そろいもそろって、よくふくれる、白い、いいのどをもっていました。

本番にむけて、雨ごいのうたの本格的な練習がはじまったのです。

「ケロップ、ポップの、ポの声を、ぽったり、ぼとり、ぽったり、ぼとり、丸みのある音にするように! 口をまずは閉じ、急に丸一るく大きく開けて、吐く! ぽっ! ぽっ、ぽっ、ぽっ」
「ようーし、そうだ、そのちようし!!!」

ケロップの指導で、本番の、雨ごいははじまりました。

カエルたちの雨ごいの歌は、村をこえ、山をこえ、町をこえて、みんなの願いを乗せて、どこまでも、広がっていきました。

カエルたちの雨ごいの歌は、雨を迎える喜びに飛び跳ねながら、空高く、昇っていきました。「おや、空に雲さんたちが、集まって来たぞ！！」

町のひとびとも、村人も、カエルも、かたつむりも、けものたちも、鳥も、虫も、草も木も、花も、みんなで、待ちにまつた雨です。

はだかの王さまも二本のやりをのばしています。空気が湿気をおび、暖かく、ひたひたと、地上をつつみこんでいきました。

はじめの、ポツチンが、ポワンのおでこで、はねました。

つぎの雨が、ポツチン、つぎのつぎの雨が、ポツチン、ポツ、ポツ、ポツポツポツポツ、ポツポツポツポツ、ポーツ、ポポツツ………。

もう、雨は、降りやみません。

「楽しいなあ。ああ、すごーいなあ！！」

もう、だれにも雨を止めることなど出来ません。

「うれしいなあ！！ 生きているなあ！！」

村人たちが、町のひとびとが、雨でぬれるのもかまわず、おどりだしました。

ポワンは大いそぎで、王さまをそっと、かかえあげました。あんまり軽すぎて、ポワンの涙が

雨になりました。ほんとにそれでいいのかなあ？

カエルくんたち、あんまり歌がうますぎたから、こんなにたくさん雨がふって来たんだよ。ポワンは思いました。

これでは、カエルは元気でも、かたつむりが水に流されてしまいます。

「大変だー！！」

いちはやくキケンを感じ取った王さまが、ポワンのポケットの中から叫んでいます。

「おーい、カエルくん！ おーい、カエルくん！ おーい、カエルくん！」

ポワンも大きな声でよびました。

カエルが一匹、のんびりした、カエルおよぎでやってきました。

「ああ、カエルさん、助けてください！ かたつむりさんたちを助けてあげてください！」

ポワンは声をからして、たのみました。カエルは聞こえたのか、聞こえなかったのか？ 空を見上げて知らん顔です。雨がすこし、小降りなつたようです。 空を

カエルは、ポワンの目の前で、とくいそうにカエルおよぎをしてみせました。

干上がっていた池に、水が、音をたてて、流れこんできます。

池の水面がぐんぐん上がっていききました。

「カエルさん、助けてくださいーい！！ どうか、かたつむりさんを助けるために、お友だちのカエルさんを集めてください！！ この村に、かたつむりさんがいることは、わかっている。話し

てくれたのは誰だつて？ それは、ケロップくんだよ！」

かたつむりたちの命が、かかっているんだもん、ヒミツなんていってはいられないよ。

「ああ！ ケロップなら、すぐやってくるよ！」

そのとき、カエルたちが、白い波をたてて、泳いでくるのが見えました。

ケロップと50匹のカエルのようです。ケロップにくらべて、大分小型なのがわかりました。よく見ると、カエルくんたちは、背中に一ぴきずつ、かたつむりを乗せていました。

助かったのです。

カエルたちは黄金の御殿からすだつて、今、元気いっぱい、カエル泳ぎで、背の上のかたつむりを無事にとどけるために、泳いできます。

それは美しい眺めでした。ケロップを真ん中にして、両側に子ガエルを従え、白い三角形の白い波をけたてて、やってきました。しかも、背中にはかたつむりたちの丸い家が、陽光をうけて、輝やいていました。王さまの子孫に違いないな、とポワンは思いました。

ポワンは、上着のポケットを、上からそつとたたきました。

「ポワン！！」

なつかしい、お兄ちゃん、アワンの声です。見ると、池のそばにアワンが立っていました。

学校はどうしたのかな？ たすけをもとめたばくの声が聞こえたのかな？ ポワンは思いました。

「これに、のっていけば、岸にたどりつけるぞ!!」

アワンの流した板切れにとりついては、かたつむりが見えます。

「王さま!! あとのかたつむりは、じゃがいも畑の、しげみの中です。十一匹、ぶじでいますよ!!!」

進んでくるケロップが、王さまにむかって手をあげました。この洪水では、もう、ヒミツはなしなのでしょう。

「王子は、あとに残ることをえらびました!!」

ケロップが、王さまに向かって頭をさげるのが見えます。

「ありがとうー!!」王さまが、先に目玉のついている、長い二本のやりを力いっぱい、振り回しているのがみえました。

ポワンも、ちぎれるほどに手をふりました。

アワンがよそ行きの服をきて、ネクタイまでしめているんです。

「どうしたの？」

ポワンがおどろいてアワンを見ました。

「逃げてきたんだ、家出をして来たんだよ！」

ポワンは笑いました。

「ぼくならわかるけど、お兄ちゃんがなんでえ？」

「ぼくは、ポワンの出て行ったあとで、一人で三十体の遺体を、火そうにしたんだよ。こんな悲しみは、この十一歳でおわりにしたい！！」

「なんの話？ おどすのはやめてよ。それでなくたって、ぼく、大変なんだから！」

ポワンは心ぼそくなってきました。これでは、たのみのツナが切れてしまいます。

「ごめん、ごめん！！ こっちにも、いろいろあってな。三十体のい体って、かたつむりの死体のことさ。石の、いや、ごてんの下から、たくさんの死んでいるかたつむりが発見されたんだ。なぜ、そこにいたのか？ なぜ、ごてんの下じきになったのか、わからない！！」

アワンは首をふっています。

「それで？ お兄ちゃんが、何で、家出をしなければならんだか、ぼく、わかんない？」

ポワンはいいました。

「そうだろうな！ ポワンは、トケイ王を知っているか？」

「いや、トケイでもはつめいした人？」

「ちがう、かたつむりの王さまだ！ パパが話してくれたんだよ。かたつむりのそうぎのあとでな。この服は、そうぎにしゅっせきしたしるし。ぼく、そのまま、来てしまったから……」

「なんで？ パパがそんなこと知ってるの？ かたつむりでもないのに？ そうぎだなんて、どうして、そんなことになるのかなあ？」

ポワンはふしぎそうに首をかしげています。

「だろう！ それが、パパは言うんだ。ぼくの血のなかには、ぼくたちの血のなかには、かたつむりの血がながれているんだって！」

アワンの顔が困っているように見えます。

「フーン、それって、なんかの、お話なんでしょう？」

ポワンが言いました。

「いや、パパは、まじめだ！」

アワンはポワンをじろじろ見つめなおしていました。

「にってるかな？」

アワンがつぶやいています。

「だって、かたつむりには、もともと、赤い血ってあるのかな？ 白い血ならあるのかな？」

ポワンはポケットのなかの王さまを、気にして、小さな声でいいました。

「で、トケイ王って、何をしたの？」

「三時になると、困っているものを、助けたんだって！ パパも水害で流されたところを、王さまのごてんの舟で助けられたんだそうだよ。今、あるのは、トケイ王のおかげだって？ ごてん

の下敷きになっているのは、パパの兄弟姉妹だと、パパはいうんだ。気の弱い、優しい、僕の兄弟姉妹だって？」

「それって、しってるよ！ はだかになって、死んだかたつむりたちがいるんだって……」
ポワンはアワンの耳に口をよせていいました。

「僕がおかしいっていったら、パパは怒ったんだよ！ あんなに怒った。パパ見たことがなかった。それで、ふらふら歩いていたら、ここにきていた！」

アワンは困り果てたというように、お手上げのポーズをとると、前を歩き出しました。

「三時って、おやつの間だよね、その王さまと友達になりたいな！」

ポワンは笑うと、じやがいも畑をめざして歩きだしました。

王さまを王子に引き渡すためです。

この王さまにも名前があるのかなあ？ ポワンは思いました。

「何で、三時なのか、おかしいんだよ！ 王さまの時間は三時で止まっているんだって、いうんだから……」

リユククサククのなかでは、王さまのぬいだ、黄金ごてんが、カエルくんも出て行き、静かに休んでいます。

「ね、教えてよ！！ ごてんはどうしたらいいのかな？」

ポワンはアワンをふりかえりました。とたん、空気が、ビーン、ビビーンとかたまりました。

「ギャングだ!!! にげる!!!」

アワンが叫んでいます。

裸の王さまがポケットのなかで、飛び上がりました。

黒い服をきた男たちが列をつくって、膝もまげない、棒みたいなきき方で、近づいてきます。

「全体とまれ!!!」

列の中から、隊長らしい、男が出て来ました。

「かたつむり王国の代表に、あいたい!!!」

その男はアロンにむかって言いました。アロンが目くばせしました。

「ぼくが、代表の代理のものです。何か?」

アロンは、落ち着いた声でいいました。

「代理ではダメだ! かたつむりの王さまを出さない! すべて、調査済みだ、かたつむりの

王さまを出すんだ!!!」

「何のために?」

アロンが聞きました。

「あの、チビに、王さまの価値はわかるまい!!!」

ギャングの副隊長らしい男がポワンのほうに、あごをしゃくってドクズきました。

「おぼえてろ!!!」

ポワンはこぶしをにぎりしめました。

「きみたちは、われわれと戦っても、勝ち目はないんだ。こちらには軍備がある。きみらは無防備、ナイフひとつ、持っていない！！ しかも、小学生だ！！」

「それが、どうした！！」

アワンが前にできました。

「戦ったら負ける！！ 負けだ！！ 大負け！！ ベチャ負け！！ メツチャ負け！！」

「それが、どうした！！」

アワンが前にできました。

「死んだら、終わりだ！！ わかったら、すなおに、王さまを出せ！！ でないと……、戦車に

ひかれて、ペツチャンコ！！」

「なんだと！！ 出せない！！ 決して出さない！！」

アワンが頑固に、前にできました。お兄ちゃん大丈夫かな？ もう、ギヤングの男とハチ合わせ

しそうです。

「ペツチャンコになると、なるまいと、こっちの勝手だ！！ 欲の皮のつっぱった、お前らは、違うんだよ。わかったら、引っ込んでろ！！」

お兄ちゃんのアワンはまるで、やくざ映画のヒーローみたいに、歯切れよく、まくしたてました。

やりすぎなんじゃ、ポワンが、そう思ったとき、ギャングが突然、後退をはじめました。

後退した部隊のあとから、場違いな、小さな男の子が走り出してきました。

「ぼくに、ぴっかぴっかの、かたつむりをちようだい！！」

その子は、ポワンに向かって、ちいさな手をさし出しました。見ていたんだ！ ポワンは冷や汗をぬぐいました。

のっし、のっしと大きな黒い男が家来に護られて進んできます。

「わしは、団長じゃ。この子は町で、その王さまとやらを見たと言うんだ。王さまのごてんと、こうかんに、どんなことでも、かなえてやる！！ どうじゃ、考えてはくれないか？」

団長だという男は、子供をだき上げると、アワンに向かって体を広げました。

アワンがポワンを振向きました。

ポケットのなかから、王さまが目玉だけをだして、合図しています。

ポワンは団長に近づいていきました。

「わしが、かたつむりの王じゃが、わしの黄金ごてんが、欲しいのか？」

王さまはポワンのポケットのなかから、二つの目玉をのぞかせていました。

「そうです。この子がどうしても欲しいと泣くので、ゆずってはくださらんか？」

団長は、不思議そうに周囲を見回しながらいいました。王さまのいるところが、わからないようです。

「わしは、この度、考えぬいた結果、ごてんをぬぐことにしたところじゃ！ 裸でやりなおすことにした！」

「アハハ、ハ、それは、それは、当方にとっては、好都合ですな。ゆずって下さい！ ゆずって下さいませね！ ほら、よかったな、よかったな、ごてんは、おまえのもんだぞ！！」

団長は子供と手をつなぎ、小おどりしています。

「その子のおもちやか？ まあいいだろう。そこでじゃ、条件がある！！ それは、町と、村のさかいめに、じゃがいもの大木があるのを知っておるかな？ あの木を引き抜いてほしいのじゃ！！ できるか？」

王さまの声は、不思議なリズムをきざんで、かすれていました。

「ああ、そんな簡単なこと！！ 出来ますとも、出来ますとも！ それでは、この約束は成立したことに、させていただきますす！！」

団長は、紙を出して、親指に、赤い色をつけて、押し付けました。アワンは王さまの頭印を押しました。

「引き抜くことができた、あかつきには、黄金ごてんは、わしの王子から、団長であるあなたに引き渡すこととする。代理はみとめない、それでいいかな？ 黄金ごてんはおもちやでは、ないんだから！」

アワンもポワンもきびきび動き、ギャング団とかたつむり王国との調印式が終わりました。

せつかくの雨ごいで降った雨も、地割れから、どんどん、失われていき、またも、カンバツが、やってこようとしていたのです。

犯人はおおじやがいもの大木だとわかっていました。急がなければならないのを、ポワンもアワンも感じていました。

ギヤング団は、おおじやがいもの木を引き抜くことができなくて、シッパイにシッパイを重ね、とうとう、おおじやがいもの木にひもを結びつけ、ジェット機で引き抜くことに致しました。

町も村も大さわぎです。どっちが勝つか？ みんなまよっていました、おおじやがいもの木は引き抜いてほしいし、王さまのごてんはギヤング団にはわたしたくなくなかったからです。

裸になった王さまは、ひとびとの命の親として、したわれはじめています。

今日はその日で、見物席はいっぱいです。あふれた人々が、地上に寝ころんで空を見上げていました。

ジェット機のなかでは、団長が手をふっているのが見えました

「……3、2、1、0!!!」

人々の声がひびきわたり、旗がふり降ろされました。

ジェット機がカツソウロを、走り出しました。

だんだん速度をまし、おおじやがいもの木と結ばれた、ツナがはりつめていきます。

つぎのしゅんかん、ジェット機は離陸しました。

「危ない！！」

だれかが、キケンを先取りして叫びました。

空中でジェット機とおおじやがいもの木の、バランスがとれているのか、見物人には、ジェット機が停止しているように見えました。

おおじやがいもの木は、地上に大きく枝をはって、しっかりとたっていました。深く深く、広く広く、地中にクキを伸ばして、芋を太らせ、ジェット機の一機や二機で、引き抜けるとは、ポワンには、とても見えませんでした。

ジェット機と、おおじやがいもの木の、引き合いの、バランスがくずれたのは、黒い鳥の大群が、ジェット機に襲い掛かったときでした。鳥の大群はジェット機をかこんで、飛び上がったのです。地上では、地震がきて、四方八方に、割れ目ができ、おおじやがいもの木は身震いしながら、飛び立ちました。

「オオオー、オーオー、オー、オー、オーオーオー！！」

白い地茎の網目を輝かせ、白い芋をかざって！！

青い空を、今、おおじやがいもの木は、横になって飛んでいきました。

みんなの、目の上を、おおじやがいもの木は、飛んでいきます。

黒い鳥の大群に引かれて、もう、空の遠くを飛んでいました。

もう、すぐ、空に吸い込まれて、見えなくなるでしょう。

「さようなら！ さようなら！ バイ、バイ、バイバイ！！」

村人たちは、町の人々は、なごりおしそうに手をふっています。

みんなには、おいしいお芋の味がわすれられないでしょう。

今、元気でいられるのは誰のおかげだったのか？ みんなは、かたつむりの王さまを探しました。

おおじやがいもの木の、ひきぬかれた地上には、巨大な穴と、落ちたジェット機のざんがいが山をつくっていました。

その時、王さまは ポワンに抱かれて、息をひきとりました。

午後三時でした。

人々は、泣いてはいましたが、ぐずぐずしてはいませんでした。なにをしなければならぬか、王さまから、教えられていたのですから！！

みんなで、地割れを埋めることからはじめました。

今までのような、おだやかな日々を取戻すために！

「きみだあれ！ 王さまのごてんのなかに入つて、きみだーれ？ そうだ、王さまを殺して、王さまのごてんをうばつた悪ものに違いない！！」

王子は、小さな声でいいました。

「違ふよ、違ふよ。僕は、王さまと仲良しだったんだよ。王子さまに、これを届けてくれるようにつて、たのまれたのさ！ 王さまは、おおじやがいの木の引き抜かれた時、お亡くなりになった！」

王子が泣き出しました。

「ああ、泣いちやいけない！ 涙がごてんのなかにたまつたら、沈んでしまうぞ！ いやあ、この池は、思ったより、流れが強いんだな！ きみを、王子さまを、ぼくたち迎えにきたんだよ！ じやがいの畑の住み心地は、どうだった？ 王さまは気にしていたよ。王国にふさわしいとおもつたか？」

アワンが言いました。よそゆきの服をぬぎすてて、裸で、櫂でこいでいきました。

「ぼくおよげない、お兄ちゃんといたずらばかりしていないで、泳ぎを真面目に練習したらよかつたな。ぼくは海に出ても、とけることはないとおもうけど？」

「そうだ、塩分はわれわれかたつむりには、命とりだ！！」
アワンが真面目にいつています。

「お兄ちゃん、いま、なんて言ったの？ われわれ、かたつむりって言わなかった？」

「ああ、それがなにか？」

アワンが不思議そうに、ポワンを見ました。

ぴよんぴよん、ぴよーん。ケロップが、かたつむりを三匹ごてんにほうり込みました。

「さあ、これで、かたつむりくんは十一匹に、二匹だな！！」

ケロップがアワンとポワンの顔をのぞきこんでいました。

「ようし、そろったら、舟を出すぞ！！ みんなごてんにつかまるんだ！！ いいか！！」

アワンがかじをきりました。ごてんはスピードをあげ、空を飛んでいくように滑っていきます。

じやがいも畑が、左右に広がっていました。

「葉っぱがきれいなあ。おいもだけは、不思議にそだっているんだね。ここが、かたつむりの国にふさわしいと思っただの？」

ポワンは王子に聞きました。

「でもな、また、おおじやがいもの木が根を張るとしたら、お手上げだ！ もとの国に帰ることにするよ！！ 岸についたら、ごてんはこの池に沈める！！ 捨てていくんだ！！」

王子が決心したように言いました。

戴冠式です。王子さまは、王さまになりました。

カエルさんとかたつむりの合唱が、聞こえていました。うっとりするような歌声です。

「あんまり長すぎないほうがいいよ。池の水が溢れると困るから！」

パパが笑っていました。

つぎつぎに、祝辞がのべられていました。

「ぼくは、とくに、ごてんをぬいだ、かたつむりです！！ ぼくは戦うことをしません。戦車も戦闘機もピストルも持っていません。でも、誰にも負けない勇気を子供たちに見ることができて、しあわせでした。これからの王国のために、アワンとポワンが、王子をささえて、いってくれることを信じています。みちびいて下さった、われらがトケイ王に、心から感謝いたします！！」

パパがポワンとアワンを引き寄せ、頭をなでながら、祝辞を終えました。

「それで、黄金のごてんは、どこにいったの！」

お姉さんが本当に心配になったのか、お庭に向かって走っていきます。

「ぼっぼっぼっ、雨がふってきたわ！」

「楽しいな！ ああ、うれしいなあ！」

「すごいなあ！！」

町の人たちが歓声をあげました。

そのとき、かたつむり王国の王子さまの頭に、小さな王冠が光りました。

「さあ、戴冠式じゃ！！ おお、すばらしいぞ！ 黄金ごてんなんぞ、なくなつて、立派な、立派な王さまじゃ！！」

王さまの満足そうな声が、ポワンの耳で、ふるえていました。

おわり